

令和4年(2022年)7月22日 一学期終業式

校長

みなさん、こんにちは。

今年は6月中に梅雨が明け、6月末に酷暑が訪れるという不思議な気象現象がまた起こってしまいました。ところがここ2週間ほどはまた梅雨のような気象に逆戻りとなりましたので、最終的に気象庁が今年の梅雨についてどのように判断するのか興味のあるところです。いずれにせよ、これだけ例年とは異なる気象状況を目の当たりにして、地球環境に関する課題というのは、人類にとって最大の課題であるという意見に説得力があるように思われます。

さて、とんぼ祭、お疲れさまでした。深志生の熱意、工夫、高いポテンシャル、底力、そういったものを存分に感じさせてもらった4日間でした。そして、とんぼ祭から二週間が経ちましたが、とんぼ祭ロスに、やや気持ちも沈みがちになっていた皆さんも、そろそろ気持ちの区切りをつけて、新しい一歩に進みだしていることを期待しています

新型コロナについては、また物凄い勢いで感染者が増加しています。感染すれば症状がなくても数日拘束されてしまいますし、後遺症も心配されるところです。身を守るためにも感染症対策については緩めることなく、一人一人の自覚に基づいた判断と行動が求められていくと思います。そうした思考力、判断力もまた、生きていく力として必要な学力です。周囲にただ流されるのではなく、自分で考えて行動できるようになってください。

三年生はいよいよ進路という大きな目標に向けて進み始める時期を迎えました。夏休みはまさに目標に向かう姿勢を定着化させる時期と言っても過言ではないと思いますが、そのやり方や進み具合、価値観は一人一人異なるのですから、周囲に惑わされるのではなく、自分で考え判断できるようにしていただきたいと思います。学校も精いっぱいバックアップしますので、先生方にどんどんと相談をしてください。

さて、今年もあと10日ほどで、8月1日がめぐって参ります。

東北の方々はもちろん、日本人の多くの人たちが3.11を忘れることができないように、深志高校にとって、8月1日は決して忘れることができない日であると言ってよいでしょう。今から55年前の、1967年、昭和42年8月1日、その日は本校にとって、悲しく痛ましい事故の起こってしまった日です。西穂高岳独標での落雷により、11名の生徒の尊い命が奪われるという遭難事故です。

2、3年生は、昨年、一昨年の1学期終業式の折に歴代の校長先生からこの事故のお話を聞いていると思いますのできっと記憶に残っていると思いますが、今年も私からお話をさせていただきます。繰り返しにはなりますが、年に一度のことですから、記憶を新たにするという意味で聞いてください。

1年生は初めてですから、ぜひ記憶に留めていただきたいと思います。

当時、本校では、毎年夏休みに2年生の希望者を対象に、西穂高岳登山を行っていました。西穂高岳というのは、長野県と岐阜県の県境にそびえる標高2909mの山で、最後の山頂までは、なかなか険しい道のりです。

当時の行程は2泊3日で、1日目は上高地へ入ってベースキャンプに1泊、2日目は西穂の山頂まで往復してベースキャンプに戻って2泊目、3日目に松本へ帰るという日程でした。

事故の起きた昭和42年の2年生は、深志21回生の皆さんですが、参加希望者が多く、50人くらいずつ2班に分けて、前期と後期の2回で実施することになっていました。

事故にあったのは、その前期の方でした。

事故の当日は快晴の天気、朝早くベースキャンプを出発して、若い足で、お昼ごろには西穂の山頂に着きました。

ところが、ここでぽつりぽつりと雨が降り出し、雷の音も聞こえてきたので、急いで下りにかかりました。

そして、生徒41人、先生5人の46人の一行が、独標と呼ばれる場所を超えようとした、午後1時40分頃に、深志の下山を急ぐ一団に落雷があったのです。

独標というのは独立標高点という国土地理院が定めた高さを観測するための基準となる地点のことで、三角点や水準点の仲間だと思ってください。西穂山荘と山頂との間に、高さ10メートル～20メートルくらいのピークとなる岩山があって、山頂に行くのにも帰るのにも、尾根伝いに一回そのピークを登って降りる必要があります。

狭い尾根ですので、両側が崖になっていて、迂回することはできません。

雷は独標を登っている列の後方に落ち、独標にいた22人のうち、11人が亡くなりました。以上が、本校の悲しく痛ましい事故の概要です。

毎年、21回生の皆さんを中心にした有志の方々が、8月1日に西穂に慰霊登山を行ってきましたが、ここ3年ほどはコロナの影響や、頻発した北アルプス周辺の地震を配慮して登山の実施を見送ってきました。しかし今年は登山道の安全性が確認できたことや十分な感染症対策を行いながら、OBOG有志の方々、さらには本校の山岳部によって慰霊登山が行われる予定です。

この事故については、当時2冊の報告集がまとめられています。一冊は事故に至る過程や要因の分析、事故後の対応、捜索や救助活動について詳細にまとめた「西穂高岳落雷遭難事故調査報告書」、そしてもう一冊が事故にあわれた方々の証言や、亡くなった方々のお一方お一方について、16歳あるいは17歳までの人生やご家族や友人の思いを綴った追悼文集「独標に祈る」の2冊です。

私がこの事故のことを初めて知ったのはこの事故から7～8年ほど経った中学生の頃でした。そのころ、私は父親の留守にたびたび父の仕事部屋に忍び込んで興味のある蔵書を読んでいたのですが、その時に見つけたのがこの2冊の本でした。特に「独標に祈る」には、中坊だった私にも亡くなった方々の命の輝きがビシビシと伝わってきて、切ない思いが胸に溢れました。彼らが抱いていた将来への大きな希望、強い熱意と意欲をもって深志高校を受検したこと、入学してからの様々な悩み葛藤の中で1年半を過ごした様子、ご家族の深い愛情とそれゆえにどうにもやり場の無い悲しみ、幼馴染あるいは中高での同級生たちの友情と悔しさ、文章に込められた一つ一つの思いは、周囲の皆さんにとって永遠に消えることなく、そして決して癒されることなく続くのであろうと

感じました。そして、当時できれば深志高校を受検したいと考えていた中学生の自分に対し、一つ一つを重ね合わせていた記憶があります。自分にとっても、思春期の入り口で、新たな気づきがいっぱいありました。自然の過酷なまでの厳しさ、人間の弱さ、否応なく突然引き裂かれることの悲しみ、一方で、今、自分が生かしてもらっているということ、命が自分だけのものではないという感覚、また自分は弱い存在なのだけれど、どこかに輝くものがあるのかもしれないという思い、などなどです。

私は、現役生の皆さん方にも、今、目の前に関わっている人を大切にする、
今という時間を精一杯生きる、

当時、多くの人を感じたであろう、こうした思いを引き継いでいってほしいと願っています。

今年も8月1日、午後1時30分に、講堂南の慰霊碑前で追悼式を行います。

毎年ご遺族や同級生などの関係者の皆さんが集まります。ただ、遺族の方がだんだんお年を召してきて、追悼式に行きたいのだけれど、残念ながらうかがえませんというような電話が入ってきています。私はそんなご遺族の慰霊の気持ちを可能な限り受け止めて、追悼式に参加したいと考えています。

皆さんも、感じるころがあれば、慰霊碑まで足を運んでみてください。また図書館には先ほどご紹介した本がありますので、関心をもたれた方は目を通してみてください。

夏休み中には8月15日、終戦記念日もあります。

原爆をはじめ、戦争では途方もない命と幸せな暮らしと人権が奪われました。そして今、世界を見ると、再び戦争により大変多くの命が失われています。8月は平和について考える月でもあると思います。そして命について考える月でもあります。ぜひ自分の命の大切さについても考えてみてください。

とんぼ祭の閉祭式でもお話をしましたが、皆さんの中にも様々な悩みを抱え、苦しみを抱えている人も少なくないと思います。周りの人と比べると、自分は劣っているのではないとか、変わっているのではないかなど、つつい考えて落ち込んでしまうこともあるのではないのでしょうか。でも皆さん一人一人も輝いていることは間違いなく、それを特定の物差しで測り比べるなんてできません。自分が頑張ったな、とか、ちょっと良かったな、と感じた瞬間に自分を大いにほめてあげましょう。そしてそれを、さらに伸ばすことのできるよう、取り組んでみて下さい。

そうは言っても、自分に自信が持てない、自分はダメなんじゃないかなと思ってしまふ人や、人間関係が厳しいな、という切なさを抱えている人は、ぜひ、周囲の誰か、または先生たちや友達の誰かに相談してください。苦しいときはSOSを出して構いません。相談して少しでも気が楽になれば、エネルギーがわいてきます。ぜひ自分を大切にしてください。そして、夏休み明けにはまた元気に顔をそろえてほしいと、私は願っています。